シェパードの忠実

みくも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シェパードの忠実

【Ｎコード】
Ｎ３６５０Ｋ

【作者名】
みくも

【あらすじ】
警視庁捜査１課に配属されたキャリアの生岐。彼女が１課を志望したのは理由があって……。

上

三隅(みすみ)巡査部長が刺された。
その一報は衝撃的に、それでいて至極当然の出来事の様に。複雑な響きで警視庁の内部へ広がった。
大変な事件だ。
法の番人たる警察官が刺されると言うのは、警察組織そのものにさえ傷を付け兼ねない。
けれどもあの三隅なら、そう言う事もあるだろう。
騒然となりながらに、どこか醒めた空気の中にはこんな意味が含まれていた。
私は、唇を噛む。
いくら疎まれているからと言って、刺されて当然なんて事はないはずだ。
「生岐(いき)警部補、どちらへ？」
「病院です」
私は一言だけ答えて、机を離れた。
好奇の視線が刺さるのを感じる。
「いいなぁ、三隅は。美人のキャリアさんに気に入られて」
ドアを潜ろうとする背中に、そんな声が浴びせられた。
警察庁から出向する身である私が、出世コースの警備部や公安ではなく捜査1課を希望したのは珍しい事だったらしい。
その志望動機は、三隅だ。
どんな人か知りたかった。誰よりも傍で仕事をしたかった。もっと言うなら、警察官を志したのさえ三隅のためだ。
もちろん、こんな個人的な理由を誰に言う訳もない。しかし私が三隅と言う男にこだわっている事実は、やがて周囲に知れた。
先ほどの揶揄は、そこにも理由がある。だが大半は、三隅に向けられた悪意が原因だと思う。

三隅と言うのは中々に忙しい男で、不祥事を恐れる上司からは煙たがられ、同僚には功績を妬まれているのだ。
あの人のやり方がまずいのは解る。だが、あれほど優れた刑事はいない。
どうして、その事を素直に認める人間がいないのだろう。
私は真っ直ぐな廊下を歩きながら、悔しいのか悲しいのか解らない様な気分になった。
警察病院に到着すると、玄関の前に人影がある。ダークグレーのスーツに、よれよれのネクタイ。
「何してるんです、三隅さん」
「あ？」
「だって、刺され……」
呆気に取られる私をよそに、当の本人は面倒臭そうに「ああ、刺された」などと言う。
情報と違う。何と三隅は自分の足でぴんしゃん立って、口からは煙草の煙をもわもわと吐き出している。
「その割に、お元気そうですね」
「相手は重症だけどな」
つまり、返り討ちにしたと言う事か。
全身の力が抜ける。刺された事は刺されたらしいが、この様子なら軽傷なのだろう。ほっと息を吐くと、三隅に睨まれた。
「構うんじゃねぇよ」
そして私を置いて歩き出す。
これはいつもの事で、三隅は私を遠ざけたがる。だから私もいつも通り、後に付いて歩き出した。
三隅は上司や同僚に何を言われても平気なくせに、私の事だけは苦手みたいだった。女キャリアのお気に入りと言われるのは嫌なのか、この悪態にはめくじらを立てる。
しかし実際、私が隣にいると不機嫌にはなるが、大人しくもあった。そのために、課長や係長は私と三隅をよく組ませるのだ。

自分を嫌う人間とみっちり一緒にいるのは息苦しい事もあったが、私にはこれも幸運だった。
足の速い背中に問う。
「どうして刺されたりしたんです」
「モテるもんでな」
恨まれる覚えが多くて解らない、と。
「死なないで下さいよ」
「関係ねぇだろ」
「まだ何も、教わってません」
三隅は肩でため息を吐いた。背中を向けたまま、俺はセンセイじゃねぇよ、などと小声で言ったきり黙り込む。
私はその背を懸命に追って、両足を動かした。
やっとここまで、追い付いたのだから。

何故私が、三隅にこだわるかと言う話をしよう。
十年以上前の事だが、私には誘拐された経験がある。
父が会社を経営している関係で、私は裕福な家庭に育った。そこに目を付けた、身代金目的の誘拐だった。
犯行は単純。小学校の下校途中、背後から近付いてきた灰色のワゴンが私の真横で急停車した。スライド式のドアが乱暴に開いたかと思うと、あっと言う間に車内へと引きずり込まれたのだ。
黒っぽいフィルムで窓を塞いだ車内後部は薄暗く、私は羽交い締めにされた上に口を塞がれていた。口元に押し付けられた男の手が軍手越しにも湿っていて、それが気持ち悪かった。
別の男が「大人しくしろ」と脅したが、言われるまでもなく身じろぎ一つできなかった。恐ろしさでだ。覆面で顔を隠した三人もの男に囲まれて、自分がこれからどうなるのか解らない。完全に混乱していたはずなのに、体は頭より先に状況を理解してガタガタと細かく震えていた。
粘着テープで口と手足の自由を奪い、廃工場の様な場所に連れて

行かれて床の上に転がされた。
床は砂か埃かも解らないもので、ザラザラと滑る。そこに頭を擦り付けて、心臓を締め付ける様な不安と、胃の底からこみ上げてくる吐きそうに冷たい恐怖に耐えようとした。
男達は一人を見張りに屋外へ出し、残った二人で私の家に電話を掛ける。身代金は三千万にするらしい。高いのか安いのか、私には解らなかった。
二人が電話で交渉をしていると、見張りに出たはずの男が戻ってきた。三人は揃いの黒い覆面に黒いジャンパーで、ズボンと靴はそれぞれ違った。
入ってきた男は異常ないとでも言う様に、片手を上げる。二人は特に気にするでもなく、構ってられないふうにそれを見ようともしなかった。
電話での会話に集中する二人をよそに、彼は私に近付いた。汚れた床に片膝を突き、覆面の口元で軍手をはめた人差し指を立てる。それから極力音を立てない様に注意しながら、それでも素早く上着のジッパーを下して前を開いた。
小学生の子供にも解る。
紺色の上着に、左胸に光る銀色のバッジ。
交番で見掛ける、おまわりさん。
身分を明かして安心させると、犯人二人から死角になる場所に移動した。私を抱えたまま窓から抜け出し、建物の裏手に回る。そこには手錠でフェンスに繋がれて、ぐったりと気絶した男がいる。これが本当の犯人なのだろう。
私の手足を自由にし、素顔になった若い警官はジャンパーと軍手を脱いでスニーカーをその辺りに放り投げた。代りに、揃えてあった革靴を履く。
近くの路地に停めた自転車に私を乗せると、後は力任せにペダルを漕いで一目散に逃げ出した。

中

こうして私は、三隅と出会った。

三隅は私の両親から大変な感謝を受けたが、警察内部では厳しい批判に晒された。その事実は、後に知った。

現に命を救い、犯人も無事検挙された事から公式な処罰はなかった様だ。だが手順を無視した三隅のやり方は、支持されない。

警察の捜査とは、チームプレイが基本だ。そこには規律があり、セオリーがある。

それに、嫉妬も。

三隅が私を救ったのは、偶然だった。自転車で巡回中、人がいないはずの廃工場に見慣れないワゴンがある。それに不審を抱いて様子を窺うと、建物の中に拘束された私を見付けたと言う訳だ。

しかも窓から覗き込んでいるのを見張り役の男に見られ、セオリー通りに応援を呼んで態勢を整える余裕なんかなかったのだ。

いい方に転がったからよかったものの、人質に害の及ぶ危険性の方が大きかった。不可抗力の要素があったとは言え、その批判は甘んじて受ける他ない。

しかしだからこそ、私は疑問だ。

当時の三隅は警官になったばかりで、年齢は十九かそこらだったはずだ。

ほんの少し前まで学生で、子供みたいな年齢の人間だ。幼い命が懸かっていたとして、どうしてあんな危険の中に飛び込めたのだろう。人質も危険だっただろうが、あの場で警官と知れたら自分の方が危なかったのに。

私には自信がない。

あんなふうに、誰かを助けられるだろうか。

だから、三隅が全ての理由だった。私はあの人を知りたくて、あの人の様に誰かを助ける人間になりたくて、警官になったのだ。

ただし、スタートは少なからずの失望から始まった。
半年前に警視庁捜査1課への配属が叶った私は、憧れの人にフルネームで挨拶した。
結果、三隅は一瞬奇妙な顔をしただけで、新人の相手をするのは億劫だとでも言う様に席を立った。愕然とした。覚えていないのだ、あの人は。自ら助けた子供の名前さえ。
以来、その事に関してだけは、少し三隅を恨んでいる。

病院からの帰路、三隅はリクライニングを目一杯に倒して助手席に寝転がっていた。
しばらく大人しくしていたが、ハンドルを握る私が交差点を曲がろうとすると口を挟んだ。
「真っ直ぐ行け」
「でも、戻るなら右に」
「本庁じゃねぇよ」
「え？　じゃあ、どこへ？」
てっきり警視庁に戻るのだと思っていたのに、違ったらしい。当然行き先を問うと、三隅は黙った。
「……真っ直ぐですね」
私は諦め半分で大人しく従う。
指示通りに車を走らせると、繁華街の雑居ビルに辿り着いた。これはまずい。私はハンドル寄り掛かり、頭を抱えた。
一階は普通の不動産屋の店舗だが、二階から上は暴力団の事務所なのだ。
「お前は帰れ」
車を降りながら言い捨てて、一度もこちらを見ずに行ってしまう。
冗談じゃない。
慌てて車を降り、後を追った。
「帰れ」
「ここで見捨てて帰ったら、一番面白いところを見逃します」

階段に片足を掛けた格好で、三隅が少しだけ振り返った。鬱陶しい、と顔に書いてあるのが見えそうだったが、もう何も言わなかった。

無遠慮にドアを開けると、事務所中の人間が一斉にこちらを見る。三隅はそれに臆する事なくずかずかと上り込んで、三人掛けのソファにどっかりと座った。私は後ろ手に腕を組み、その横に立つ。

そうして見渡すと、この場にいるのは十人ほどだ。Tシャツや派手な柄シャツを着た若そうな顔から、どうした具合か一目でその筋と解るスーツの男達。

その中の一人に耳打ちされて、奥の部屋から姿を現した男がいた。私は少し緊張を覚える。他の男達と、何かが違う様に見えたからだ。

「江南(えなみ)と申します。社長が席を外しているので、代理として話を伺いますよ。刑事さん」

三隅の正面に腰掛けて、江南は慇懃に笑う。

刑事だと知られているのを意外に思って、しかしすぐに納得した。そしてまた、頭を抱えたくなる。

この組の幹部に一人、私達が担当している殺人事件の容疑者がいた。まだ証拠も揃わず、ただ捜査線上に名前が浮んだと言う状況に過ぎない。だから事情聴取もまだのはずだ。が、ここにいるのは三隅なのだ。容疑者の前に姿を見せて、疑惑を仄めかして揺さぶりを掛けるくらいの事はしたかも知れない。

ありそうな話で、私は目の前が少し暗くなった。

私の心労など気にも留めていない様子で、三隅は自分の上着を摘み上げた。中のシャツを示す。左の脇腹辺りが少し破け、滲んだ血が乾いている。

「丁寧に挨拶してくれた奴がいてね。お宅の人間だろ？」

「知りませんね。誤解じゃありませんか」

「とぼけなくてもいい。ここで見た顔だからな。石上(いしがみ)って奴だ」

「全員の顔と名前を覚えている訳じゃない。もしかしたらウチの者かも知れませんが、だとしても勝手にやった事ですよ」

「そうか？　礼を言いにきたんだぜ。お陰で、お前らを徹底的に調べられる」
江南の表情に、毒蛇みたいに獰猛な色が過ぎった。すぐに失せ、嘘くさい微笑みに戻ったけれども。
三隅は詰まらなそうにそれを見て、立ち上がった。
「またな」
「次はお茶くらい出しますよ」
うそ寒くなる様な社交辞令には応えず、事務所を出た。
私はビルの階段を降りながら、三隅に質問する事にした。さっぱり解らなかったからだ。
「何だったんです？」
「あ？」
「三隅さんを刺したところで、捜査の妨害にもならないでしょう。捜査員は一人じゃないんだし」
何も答えないのはいつも通りだったが、前を行く肩は階段の傾斜でいつもより低い。それを見るともなく目に入れながら、私は考えを巡らせた。
事件の関係者に、捜査員が襲われる。
この状況で関連がないとは考え難いが、しかし矛盾する。警官が襲われたとなれば、むしろ余計に捜査が厳しくなるものだからだ。
捜査線上に浮ぶ人物を庇いたいなら大人しくしているか、自分がやったと身代わりになるしかない。
だが現に三隅は襲われ、幾ら人望がないと言っても一応は警察官だ。身内の仇を取るために、捜査員達は一刻も早く犯人を挙げようと躍起になるに違いない。
これでは得たいはずの結果と、真逆の事態を招いてしまう。
……それとも、そうしたいのだろうか。
さっさと逮捕でも何でもさせて、事件を終らせてしまいとでも言うのか。
だとしたら、何のために？

幹部を逮捕させてでも、終らせたい理由。
「もっと重大な、隠したい何かがある……？」
知らずの内に声に出してしまっていた。三隅が驚いた様に、こちらを振り返る。と、同時に、階段の数段下から手が伸びて私の腕を掴んだ。力任せに下に引く。感覚としては、突き落としたと言ってもいい。勢い余って、私は残り十段ほどを転げ落ちたからだ。
頭は庇ったが、尻と背中はかなり打った。ちょっと泣きたくなるのを堪えながら、この仕打ちは酷すぎるのではないかと恨みを込めて三隅を見上げた。
コンクリートを砕く重たい音が、耳を打つ。

下

見上げて、反省した。

三隅はどうやら、私の事を助けたらしい。

薄暗い階段の上では、三隅が男の手から鉄パイプを叩き落すところだった。鳩尾に一撃を入れ、階段の下に落す。そこへ新手が現れて、ナイフで切り付けた。三隅はそれも叩き落し、腹に拳を入れて片付ける。そうするとまた次がくる。キリがない。私が慌てて階段を登ろうとすると、鋭い声で怒鳴られた。

「邪魔だ！　応援呼べ」

それもそうだ。急いで車に戻り、無線を取る。車内で状況と場所を伝えていると、フロント硝子が白く濁った。一瞬、何事か解らない。耳に届いているはずの音と、映像が結び付かなかった。もう一度、バンッと風船が破裂する様な音がする。

フロント硝子が白く見えたのは、ヒビのせい。そのヒビは、バットや鉄パイプで車体を滅茶苦茶に打たれているせい。しばらくして、そう気が付いた。

「伏せろ、馬鹿！」

いつの間にか助手席に乗り込んだ三隅が、乱暴に頭を押えて低くさせる。自分はその上に覆いかぶさり、バラバラと降ってくる硝子の破片から私を庇った。

長くそうしていたと感じたが、実際はほんの少しの間だったのだと思う。車の窓は事故などに備え、特殊な加工がされている。そのためにフロント硝子は割れ難いが、窓の部分は簡単に砕けてしまうのだ。

それでも車から引き摺り出されてしまう前に、応援が現れた。

私達、つまり警察官への暴行と言う罪で、今の今まで暴れていた男達が次々と逮捕されて行く。続々と到着するパトカーと、それに乗せて運ばれる男達を何だか呆然と眺めてしまった。

そうしてふと気が付けば、三隅がいない。
無残な姿になった車から慌てて降り、三隅を探す。と、すぐに見付かった。
ビルの裏手から、こちらに向ってくるところだ。手錠を掛けた江南の腕を掴まえて、もう片方の手に大きなアタッシュケースを持っている。
それだけで、何となく事情が見えた。
江南は表で部下達が暴れている間に、アタッシュケース一杯の覚醒剤を持って逃げようとしていたのだ。
身内が大量に逮捕されているにも関わらず、顔も見せない江南の動向に三隅はピンときたらしい。何とも鼻の利く事だ。裏手の非常階段から逃げたと睨んで、見事掴まえる事に成功した。
しかも、手には覚醒剤の土産付き。至れり尽せりだ。
恐らく、これが理由だろうと納得した。
これだけ大量の覚醒剤なら、末端価格は幾らだろう。億の位は下らないに違いない。
こんなものを抱えている時に、警察に嗅ぎ回られるのは避けたかったはずだ。幹部でも何でも逮捕して、さっさと終らせて欲しいと思うのも解る。しかも差し出すのは、大事な時に事件を起したりする厄介者だ。どちらが大事か、考えるまでもない。
「怪しいと思って、その場で口にする馬鹿がいるかよ」
言って、三隅はため息を吐く。
頭には包帯が増え、開いた脇腹の傷を再び縫った。ベッドの頭を中ほどまで起し、だるそうに背中を任せている。
私は返す言葉もなく、病室の中で頭を下げた。
どうやら、私の不用意さのせいらしいのだ。秘密があるなどと呟いたせいで、江南は全部知られたと勘違いして部下達を暴れさせた。
「すいません」
「すいませんじゃねぇだろ、馬鹿。刑事向いてねぇよ。辞めちまえ」
「辞めません」

「じゃあさっさと出世して、官僚にでもなっちまえ」
確かに、それが一般的だ。
私と三隅は同じく警察官だが、その立場は全く違う。三隅は東京を管轄とする警視庁採用の地方公務員なのに対し、私は全警察を統括する警察庁に採用された国家公務員だ。
一般にキャリアと呼ばれる私達は、警視庁を含む全国の警察に出向した後、警察庁に戻る。そうなれば、警官よりも官僚の色が強い。
でもそれは、私の望みとは違う。
「私がなりたかったのは、警察官です。官僚ではありません」
「お前がどう思おうが、関係ない。向いてねぇんだ。諦めろよ」
「三隅さんなら向いている、と言う事ですか？」
「あ？」
「確かに優秀です。私には見えないものが見えてるとしか思えない。でも、三隅さん。あなたと違うからと言う理由なら、私は自分が警官に向いてないとは思いません」
「俺と比べろなんて、言ってねぇ」
「じゃあ、何です？　私の事を知らないくせに。……覚えてもいないのに、勝手な事を言わないで下さい」
目標にした人から否定されて、どうしたらいい？
唇を噛み、顔を壁に向ける。悔しさで、涙が浮んできそうだった。少しすると、背中で長いため息を聞いた。呆れているのだろうか。泣けばいいと思ってる。これだから女は。そんな事を思われるのだけは嫌だった。
振り返る。泣いていないと示すために。
「忘れるわけ、ねぇだろ」
私は、驚いた。
きっと機嫌悪く、睨み付ける様に私を見ているだろうと思っていたのに。そこにいた三隅は今までになく困り果て、どこか拗ねた様な表情を見せていた。
「初めて助けたんだぜ。それも一人で。忘れねぇよ」

「……私の、事ですか」
「他にいねぇ」
あの時の子供だと、知っている。
だからこそ、辞めた方がいいのだと三隅は言った。
しかし。
だったら、今までの態度は何なんだ。
「ひ、酷くないですか？」
「どっちがだ。そっちだろ、忘れてんのは」
「忘れてる？　私が？」
何を忘れていると言うのだろう。あれはもう、トラウマだ。忘れたくても、誘拐された時の事は今でも鮮明に覚えているのに。
すると三隅は実に軽蔑した様な顔で、「その後だ、後」と投げやりに言った。
後。制服の三隅に縋り付き、交番まで走る自転車の上で。
私は警察官を志した。
「いいじゃないですか。初志貫徹」
これは覚えている。私に人を守ると言う使命感にも似た意識を、植え付けたのは他ならぬ三隅だ。
「覚えてるなら、理解できるはずです。私がどうして警察官になりたかったか」
「だからだ」
「解りません」
三隅は傷の疼きを堪える様に、眉をひそめた。
「お前、結構なお嬢だったろ。それが好き好んで警官なんかになって、原因は間違いなく俺じゃねぇか」
「原因って。確かに理由ではありますが」
三隅は片手を頚に当て、頭を俯ける。
「それで死なれでもしたら、いたたまれねぇよ」
ボソリと落されたこの言葉ほど、私を驚かせたものはない。
心配だから、辞めろって事なのか。もしかして。

三隅は私が打ちのめされるほどの驚きの中にいるとも知らず、ぼそぼそと愚痴を零す。
「あの時だって止めたんだ、俺は」
安月給で仕事は辛いし、女が大事にされない職業だから止めておけ。子供にするには生々しい言葉を尽くした甲斐あって、私は渋々ながら諦めると約束したのだと言う。
代りに「じゃあ、おまわりさんのお嫁さんになる！」と言う、できれば穴に埋めたい代案を思い付いたそうだ。
「……言いましたか？　そんな事」
見事に全く記憶にない。
信じられないものを見る様に、三隅が喚いた。
「ふざっけんなよ！　いつこの話持ち出されるかでこの半年、生きた心地しなかったんだからな！」
だから私を避けようとしてたのか。
「そんなに怒らなくても、子供の考える事じゃないですか。まさか本気に」
「っ……する、わけねぇだろ！」
不穏な間が気になるが、これには触れない方がいいんだろうな。きっと。
何だか、力が抜けてしまった。
三隅と言う男は、ずっとこんな人間だったのだろうか。私が憧れた硬派で破天荒な敏腕刑事は、幻だったのか。
なら1課のデスクで捜査資料を睨み付け、何かが閃くと矢も盾もたまらずに飛び出して行くあの姿は？　捜査で納得が行かなければ、どれだけ階級が上であろうと構わず噛み付く無鉄砲さは？　犯罪者を前にして、恐いくらいに研ぎ澄まされた気迫を感じるあの瞬間は、間違いだったのだろうか。
――いや、それとも。
どれも本当の三隅なのか。ただ平凡なごく普通の男が、許せないと言うだけの理由で犯罪と戦っているのかも知れない。

変貌を強いるほどの決意を以って。
「三隅さん」
私は薄く笑んで、真っ直ぐに三隅を見た。
「私は、警察官を辞めません。あなたの様になりたいから」
無力な人間ではあるけれど、それでも守れるものがあるのだと信じよう。
そう信じ、戦う人がいるのだから。

（シェパードの忠実／了）

Ｃｏｐｙｒｉｇｈｔ（Ｃ）　２０１０　ｍｉｋｕｍｏ／１９７９．
Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔｓ　ｒｅｓｅｒｖｅｄ．

下（後書き）

最後まで読んで頂き、ありがとうございました。

職業小説参加用小説です。
迷宮に迷い込みました。
職業小説って……何だ。（ゲシュタルト崩壊）

ご指摘などございましたらお聞かせ頂ければ幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3650k/

シェパードの忠実

2010年10月8日12時34分発行